

メッセージアウトライン サムエル記第一20:1～42

「ダビデとヨナタンの誓い」

[1]「ダビデはラマのナヨテから逃げて、ヨナタンのもとに来て言った。『私があなたの父上の前に何をし、私にどんな咎があり、どんな罪があるというのですか。父上が私のいのちを求めておられるとは。』」

ダビデ殺害の意に燃えるサウルから身を避けて、ダビデは預言者サムエルの主催する預言者集団がいたラマのナヨテに逃げていたが、そこにもサウルの追手が近づいてきたので、そこから逃げて、サウルの長男である王子ヨナタンのもとに行った。ヨナタンの住まいはサウルの王宮とは別の場所にあった。ダビデとヨナタンは熱い友情に結ばれていた。→18:1-4 そして自分に何の罪咎があるのでサウルは彼のいのちを求めているのかと尋ねる。

[2]「ヨナタンは彼に言った。『とんでもないことです。あなたが死ぬはずはありません。父は、事の大小を問わず、私の耳に入れずに何かをするようなことはありません。どうして父が、このことを私に隠さなければならないのでしょうか。そんなことはありません。』」

以前にヨナタンの執り成しによってサウルはダビデを殺さないと言っている。→19:4-6 それゆえ父サウルが自分に何かを隠して、ダビデを殺すはずがないとヨナタンは断言する。

[3-4]「ダビデはなおも誓って言った。『父上は、私がおあなたのご好意を受けていることを、よくご存じです。【ヨナタンが悲しまないように、このことを知らせないでお願いします】とおっしゃるのです。けれども、主は生きておられます。あなたのおたましいも生きておられます。私と死の間には、ほんの一步の隔たりしかありません。』ヨナタンはダビデに言った。『あなたのお言われることは、何でもあなたのためにします。』」

ダビデとヨナタンの間にある契約と友情を知っているゆえに、サウルはわざとヨナタンに知らせないのだとダビデは言う。彼は自分と死との間にはほんの一步の隔たりしかないとお切実に思っている。それを受けてヨナタンはダビデが言うことなら何でもする。すなわち力になると言う。

[5-8]「ダビデはヨナタンに言った。『明日はちょうど新月祭で、私は王と一緒に食事の席に着かなければなりません。でも、私を行かせて、三日目の夕方まで、野に隠れさせてください。もし、父上が私のことをとがめたら、おっしゃってください。【ダビデは自分の町ベツレヘムへ急いで行きたいと、しきりに頼みました。あそこで彼の氏族全体のために、年ごとのいけにえを献げることになっているからです】と。もし父上がお『よし』とおっしゃれば、あなたのおしもべは安全です。もし激しくお怒りになれ

ば、私に害を加える決心をしておられると思ってください。どうか、このしもべに真実を尽くしてください。主に誓って、しもべと契約を結んでくださったのですから。もし私に咎があれば、あなたが私を殺してください。どうして父上のところにまで、私を連れ出す必要があるでしょうか。』

「新月祭」…毎月第一日。いけにえを献げる聖なる日と定められている。安息日でもある。→民数記10:10, 28:11-15、イザヤ66:23

ダビデは新月祭に王やヨナタン、将軍アブネルと一緒に食事の席に着かなければならないが、彼は三日目の夕方まで野に隠れると言う。そしてダビデの不在をサウルがとがめたら、自分の町ベツレヘムへ氏族全体のためにいけにえを献げに行っていると弁明するように頼む。その結果のサウルの反応が「良し」であればダビデは安全、「激しい怒り」ならば害を加える決心をしていると思ってくださいとダビデは言う。そして、主に誓っての契約のゆえに、私に真実を尽くしてください。もし自分に咎があるならばサウルのところまで連れ出すまでもなく、あなたが私を殺してくださいとまで願う。「契約」→18:3 真の兄弟以上の関係を持つ者としての契約。

[9-10]「ヨナタンは言った。『とんでもないことです。父があなたに害を加える決心をしていることが確かに分かったら、あなたに知らせないでおくはずはありません。』ダビデはヨナタンに言った。『もし父上が厳しい返事をなさったら、だれが私に知らせてくださいますか。』」

ヨナタンは父サウルがダビデに害を加える決心をしていることが分かたら必ずダビデに知らせると言う。それを受けてダビデは、だれがそのことを知らせてくださいますかと問う。

ヨナタンが直接ダビデに告げるのは人の目もあり、危険であった。

[11-12]「ヨナタンはダビデに言った。『野に出ましょう。』それで、二人は野に出た。ヨナタンはダビデに言った。『イスラエルの神、主にかけて誓います。明日かあさつての今ごろまでに、父がダビデに対して寛大であるかを探してみます。寛大でなければ、必ず人を遣わして、あなたの耳に入れます。』」

野に出るとは誰にも会話を聞かれないためであり、また人目を避けるためであったであろう。

「あさつて」は今彼らが話し合っている時からみて三日目。新月祭からは二日目。その時までにはヨナタンは父サウルのダビデに対する思いを確認し、寛大でなければ、必ず人を送って、そのことをダビデの耳に入れると約束する。

[13-15]「『もし父が、あなたに害を加えようと思っているのに、それをあなたの耳に入れず、あなたを無事に逃がさなかったなら、主がこのヨナタンを幾重にも罰せられますように。主が父とともにおられたように、あなたとともにおられますように。もし私がこれ以上生きるべきではないのなら、あなたは、主の恵みを私に施して、私が死ぬことのないようにする必要はありません。しかし、あなたの恵みを私の家からと

こしえに断たないでください。主がダビデの敵を地の面から一人残らず断たれるときにも。』」

ヨナタンはもしサウルの殺意が判明し、それを彼が隠し、ダビデを逃がさなかったなら主が自分を幾重にも罰せられるようにと言う。彼は主なる神にかけてこのことを誓う。

「主が父とともにおられたように、あなたとともにおられますように」とは、サウルが主によって選ばれたイスラエルの王であり、主が彼とともにおられたのと同様にダビデにも主がともにおられますようにとの願いであり、つまり、ヨナタンはダビデが次の王であることを確信しているのである。

彼は自分が死ぬべき運命ならばそれもいさぎよく受け入れるが、「私の家」すなわち自分の家族とその子孫が断たれることがないように願う。王朝が変わると前王朝の一族、係累はしばしば殺された。

[16]「ヨナタンはダビデの家と契約を結んだ。『主がダビデの敵に血の責めを問われますように』」

これは個人と個人ではなく、ダビデ家とヨナタン家との契約である。それは一時的ではなく将来にわたって続くものである。もしそれを破るようなことがあれば血の責めを問われる。すなわち殺されるという非常に重い契約である。

[17]「ヨナタンは、ダビデに対する愛のゆえに、もう一度ダビデに誓わせた。ヨナタンは、自分を愛するほどにダビデを愛していたからである」

この誓いは14~16節の誓いのことである。

[18-23] ヨナタンはダビデに明日は新月祭であり、ダビデはその席には出ず、野に隠れているのでサウルは彼がいなことに気づく。その席でヨナタンはサウルがどのような態度を取るかを見極め、三日目に日が暮れてから隠れているダビデに結果を知らせに行く。三本の矢をダビデが隠れているあたりに放つ。その場所とは19:2で隠れた「エゼルの石」のそば。そしてその矢を子どもに取りに行かせる。子どもより矢を手前に放ちそれを取って来るように言うならばダビデは安全で出て来てよい。しかし、「矢はおまえの向こう側だ」と言ったならば、その場から去るようにと言う。

彼らの間に取り交わしたことばとは14~16節のことばであり、それについては、主が永遠の証人であるとヨナタンは言う。(23) ヨナタンとダビデの約束事はすべて、主の前でなされており、主が証人となってくださるのである。

[24-34] ダビデは野に隠れ、新月祭になって王は食事の席に着いた。壁寄りの席はサウル王、ヨナタンはその向かい側、アブネルはサウルの横の席。しかし、ダビデの席は空いていた。しかし、その日はサウルは何も言わなかった。「思わぬことが起こって身を汚したのだろう。きっと汚れているためだろう」(26) 新月祭の食事は宗教的なものであったので、宗教的に汚れた状態では参加できなかった。サウルは

ダビデ欠席の理由をそのように思った。しかし、二日目もダビデの席は空いていた。それでサウルはヨナタンに問うと、ヨナタンはダビデとの打ち合わせのとおり欠席の理由を答えた。(27-29) これを聞いたサウルは怒りを燃やした。

「この邪悪な気まぐれ女の息子め。おまえがエッサイの子に肩入れし、自分を辱め、母親の裸の恥をさらしているのを、この私が知らないとも思っているのか」(30) サウルは自分のことは棚上げし、ヨナタンの母親のことを口を極めて悪く言い、その息子であるヨナタンがダビデに肩入れしていることを知らないとも思っているのかと責める。確かにサウルはヨナタンとダビデが特別な友情と契約を交わしていることを知っていたであろう。しかし、サウルはヨナタンの母親はすなわち自分の妻であることを忘れているのか。怒りに任せて妻のことを悪く言うサウルの品格が非常に低劣なものになっていることが分かる。→しかし、新約聖書の教えを見よ…エペソ5:25-33、コロサイ3:19

サウルは主からすでに王としての立場から退けられているのに、ヨナタンが次の王となるという世襲を考えている。「あれを私のところに連れて来い。あれは死に値する」(31) ヨナタンが次の王になるためにはダビデを殺さなければならない。恐ろしい発想である。

ヨナタンはなぜダビデが殺されなければならないのか、彼が何をしたのかと問うが、問答無用とばかり、サウルは槍を投げつけてヨナタンを殺そうとする。それでヨナタンは父が本気でダビデを殺そうとしていることを知る。(32-33)

ヨナタンは父サウルがダビデを侮辱したので怒りに燃えて食卓から立ち上がり、食事をとらなかった。彼はダビデのために悲しんだ。(34)

[35-36]「朝になると、ヨナタンは小さい子どもを連れて、ダビデと打ち合わせた時刻に野に出て行った。そして子どもに言った。『走って行って、私が射る矢を見つけておいで。』子どもが走って行くと、ヨナタンは、その子の向こうに矢を放った」

「小さい子ども」は21節の「子ども」とは違うことば。無邪気な子どもを指す。

[37-40]「子どもがヨナタンの放った矢のところまで行くと、ヨナタンは、子どものうしろから叫んだ。『矢は、おまえより、もっと向こうではないか。』ヨナタンは子どものうしろから、また叫んだ。『早く。急げ。立ち止まってはいけない。』その子どもは矢を拾って、主人ヨナタンのところに来た。子どもは何も知らず、ヨナタンとダビデだけに、その意味が分かっていた。ヨナタンは自分の弓矢を子どもに渡し、『さあ、これを町に持って行っておくれ』と言った」

ヨナタンが「早く。急げ」と子どもに叫んだのは、ダビデに聞かせるため。子どもは単なる遊びと思っていたらう。

[41-42]「子どもが行くと、ダビデは南側から出て来て、地にひれ伏し、三度礼をした。二人は口づけし、抱き合って泣いた。ダビデはいつそう激しく泣いた。ヨナタンはダビデに言った。『安心して行ってください。私たち二人は、【主が、私とあなた、

また、私の子孫とあなたの子孫との間の永遠の証人です】と言って、主の御名によって誓ったのです。』そして、ダビデは立ち去った。ヨナタンは町へ帰って行った」

「地にひれ伏し、三度礼をした」…王子ヨナタンに対する敬意と自分に対する配慮への感謝からの行動である。「二人は口づけし、抱き合って泣いた」…男同士が抱き合い、泣くとはなんと女々しいことかと思う者は、日本の武士道精神や封建主義のはき違えであり、二人の友情による結びつきと事態の切実さ、重大さ、そして感情のほとばしりというものをよくわかっていない。

「安心して行ってください」…主なる神の守りと平安があるようにとの願い。

「私たち二人は……主の御名によって誓ったのです」→20:15~16, 23

そのようにして二人は別れた。

ここで教えられることは、ヨナタンはサウルや自分よりも、むしろダビデとその家が主のみこころと恵みのもとにあることを認めて、二人の間、そして子孫たちの間の真実を誓い合い、契約を結んだのである。ダビデはサウルの王宮から去って、それで終わりではなく、このことによって、神のご計画の中でイスラエルの王としての正統な後継者であることが示され、これからの逃亡生活の中でそれがはっきりと現されてくるのである。

また、ダビデとヨナタンの中の愛と友情は、主なる神の私たち人間に対する愛といつくしみを思わせる。神の私たちに対する愛は決して変わることがない。それはどんな犠牲を払ってもご自身のものとされようとする不屈の愛である。→ヨハネ3:16、Iヨハネ4:9~10